



日本SPF豚協会だより

2023. 7
No.92

提言

「手を取って引き上げていく山登り」

一般社団法人日本SPF豚協会会長

さぎのやとしかず
鷺谷敏一



この度の当協会の総会におきまして、北島克好会長から、協会会長を引き継ぎました鷺谷です。よろしくお願いいたします。

令和5年になり、新型コロナウイルスの感染症法上の分類も見直され、声出しでのスポーツ観戦や各種イベントの再開など、徐々にコロナ前の状況に戻りつつあります。東京でも地下鉄では、外国人観光客の家族連れもたくさん見かけるようになりました。会社でも我慢していた社内・社外との懇親会の再開など活発になっています。国産農畜産物の消費の拡大が期待されます。

しかし、世界ではロシアによるウクライナ攻撃に端を発した、エネルギー価格の上昇や様々な資材の高騰で、畜産経営においても、飼料の度重なる値上げや建設資材の高騰の影響を受け、厳しい経営を余儀なくされております。鳥インフルエンザによる鶏卵の流通不安、酪農での廃業の進行など一般紙面でも報道されているとおりです。

養豚業界においても、世界でのアフリカ豚熱の蔓延、韓国での口蹄疫の再発生、日本国内での本州四国での野生イノシシでの豚熱の蔓延により不安な状況が継続しています。

そんななか日本SPF豚協会では、2023年3月現在の集計によりますと、認定農場は176農場となり、母豚頭数では、74,481頭。戸数では、全国の5%、頭数では10%を占めるほどになりました。

その協会事業を引き継いだことは、その重責に身が引き締まる思いであります。

わたくしとSPF豚とのかかわりは、全農に入っの、研究所のSPF豚作出の帝王切開手術の手伝いからです。当時の北島先輩からよく叱られました。SPF豚事業とのかかわりは、1990年ごろ札幌勤務時代からです。岩瀬先生をはじめとしたホクレンの皆様、日浅社長、山中社長、先代の勝木社長、よく可愛がっていただきました。このへんの昔話はおいおいどこかでご披露することとします。

さて、提言ということで、令和5年度の事業計画に関連して思うところを述べたいと思います。

このSPF豚協会は、民間の養豚生産者と種豚会社と飼料会社

から選出された役員により運営されております。

種豚を生産している会社も生産者であり、肉豚を生産しているCM農家の皆さんも生産者であり、生産者同士がSPF豚の理念とSPF豚の生産管理の実践ということで、お互いに切磋琢磨できる、ほかの業界団体にはない良さを持っていると思います。

種豚会社の営業は、自社の種豚の飼い方を熟知しているのと、ヘルスチェック担当の獣医師は、SPF豚の防疫管理を熟知しているので、農場様との信頼関係を築いて、ルールにのっとり農場に入り、交配担当や分娩担当と意見を交わし、リーダーや場長に提案し、社長や経営者に進言することが可能です。

本年度は事業計画のなかに、若手の人材育成を掲げています。ピラミッドおよび会員農場の次世代交流会等の実施です。次代を担う若手がSPF養豚や協会事業に対する理解を深め、交流できる場を設けます。意見交換を通して、若い世代の考え方を事業推進に活かせるようにします。

かつて群馬県にいらした石井泰明先生の講習会で教わったのですが「養豚というのは、ベテランや先生と呼ばれるような人だけが指導できるのではなく、1年目2年目の若手でも、気が付いて養豚農家と話ができることが必ずあるものである。だから自信をもって営業しなさい。」ということでした。わが業界には、生きのいい有望な若手が沢山おります。会員皆様には、ぜひこの若手の育成に、積極的に取り組んでいただき、持続的なSPF豚生産事業の礎を作っていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

そこで、提言のタイトルとなります。

「手を取って引き上げていく山登り」。これは落語家古今亭志ん生師匠の、先代林家三平さんの真打披露でのお客様へのお願いでございます。

それでは皆様。お集りのSPF養豚生産者の皆様のみますますのご繁栄を祈念いたしまして。三本締めといきましょう。お手を拝借、いよーおっ！

定時総会を開催、全議案を承認 会長・専務理事が交代、 新体制へ

本年度の定時総会（第19期代議員会）は6月16日（金）、東京都千代田区のKKRホテル東京において開催いたしました。今年もリモート併催とし、委任状含めほぼ全員に出席いただきました。昨年度の事業経過・決算報告、今年度事業計画案および予算案などすべての議案についてご承認いただきました。また、北島克好会長と藤田世秀専務理事が退任、新たな会長に鷺谷敏一氏、専務理事に小林一彦氏が就任いたしました。会員の皆様には議案および議事録をお送りしております。事業経過報告および事業計画案等の概略を掲載します。

●令和4年度事業経過報告

令和4年度の認定農場数は176農場（GGP・GP17農場、CM159農場）、飼養母豚数は74,481頭となり、農場数、飼養頭数とも前年度より減少となりましたが、全国の飼養母豚数に占める認定SPF豚の割合は9.5%と、前年度を0.1ポイント上回りました。

CM農場の生産成績をみると、一貫経営農場では1母豚当たり年間出荷頭数が23.2頭（昨年度23.1頭：全国平均20.9頭）で0.1頭増加、A薬品費（抗菌性物質）は257円（同247円：全国平均800円強）で10円増加、農場要求率は3.13（同3.13）でした。繁殖専門農場（繁殖-II）では1母豚あたり年間出荷子豚頭数が23.9頭（同24.2頭）で0.3頭減少、A薬品費は134円（同134円）でした。肥育専門農場（肥育-II）はA薬品費が116円（昨年119円）で3円減少しました。

協会ではコロナ禍の中、引き続き感染対策を講じながら事業推進を図りました。

昨年度同様、年明けを開催時期としたSPF豚セミナーは、オンライン併用のハイブリッド方式で開催いたしました。生産成績優秀農場表彰式も3年ぶりにセミナー会場で執り行うことができました。農場におけるアニマルウェルフェアの取り組み事例やヘルスチェックの重要性についての講演もあり、充実した内容となりました。

理事会、定時総会、認定委員会、ピラミッド会議等、すべてオンライン参加併用で開催いたしました。

認定委員会はピラミッドの協力のもと事前審査を実施、会議の合理化・効率化を図りました。また、5年に一度の農場防疫設備再点検も実施しました。

協会だよりは4回発行、会員への情報提供、国の施策等についての注意喚起、またイベントやタイアップの紹介等に活用しました。協会ホームページではセミナーの様態を動画にて公開しました。また、協会50年史や協会だよりのバックナンバーについては引き続き電子書籍として閲覧できるようにしました。

ポークリーフレットの無料配布、認定マークデザイン使用の推奨、無菌豚等の誤認表示に対する抗議申し入れ等も随時実施しました。

協会の将来像、認定制度のあり方について成文化し、2度のピラミッド会議を通して協議、引き続き検討を続けることとしました。

認定業務を中心とした事務作業のDX化については、専門業者とシステム構築についての協議を開始し、実務担当者のヒアリングも行いました。事務局のスリム化については固定費低減のための調査を進めました。

農林水産省関係部署からの情報提供については、ホームページや協会だよりを活用、またピラミッドを通じて注意

喚起を行いました。

令和5年度は理事改選期にあたることから、次期役員体制について選考委員会を設置、検討いたしました。

改訂を検討していた協会パンフレットについては認知度調査、食味試験の実施が困難だったため、見送りました。

○主要行事の開催

定時総会	6月17日(金)
理事会	3月24日(金)
認定委員会	6月9日(木)、9月8日(木)、 12月8日(木)、3月9日(木)
ピラミッド会議	9月1日(木)、11月10日(木)
SPF豚セミナー	1月26日(木)

○協会の将来像について

役員作成案を成文化、ピラミッド会議で協議

○農場防疫設備再点検の実施

事務局へ提出、認定委員会で報告

○農場生産成績集計のフィードバック

ピラミッドから農場へ

○生産成績優秀農場表彰制度の継続

セミナーにて表彰式実施

○協会だより発行

87号(4月)、88号(7月)、89号(10月)、90号(1月)

○再建中のGP農場への支援

農水省への説明、現地視察、認定委員会での審議

○事務所移転の検討、事務の合理化(ペーパーレス化、認定業務のDX化)

専門業者と協議

○SPFポークの普及

ポークリーフレットの希望者への提供、デザイン使用例の紹介、食に関する雑誌とのタイアップやイベントの紹介、問い合わせ等への対応

●令和5年度事業計画画

認定事業の充実と、SPF養豚や協会のあり方等の様々な課題について検討を進めることを事業の柱とします。

主原料高、運搬費高、円安と、畜産を取り巻く環境はま

すますます悪化しています。認定農場全体の底上げを目指し、ピラミッドと力を合わせて成績向上、経営安定のための努力を続けていきます。

農場を取り巻く疾病問題については、厳しい状況が続くことが懸念されますが、万が一にも農場への侵入を許さないよう、引き続き協会ホームページや協会だより等を通じて迅速な情報提供、防疫意識の再徹底等、注意喚起を行っていきます。

また、協会創立から50年以上が経過し世代交代が進む中、新体制のもと、これからの協会を担う次世代に自覚を促し、SPF養豚に対する正しい知識、理解の涵養を図ります。

国を挙げての課題となっている薬剤耐性対策(ワンヘルス)、アニマルウエルフェア(AW)については引き続き取り組みを強化していきます。SPF豚認定農場の農場HACCP、ASIAGAP/JGAP等についても、関係各所と情報交換しながら引き続き情報提供していきます。

SPFポークについては、いまだにネット上や一部飲食店において「無菌豚」や「レアでも食べられる」といった誤った表現が散見されます。正しい理解を促し、認知度を向上させるため情報発信を強化します。

◎主要行事の開催

会員、ピラミッドの協力を得ながら、総会、理事会、認定委員会、ピラミッド会議、SPF豚セミナー等の開催を通して協会事業の推進を図ります。

◎ピラミッドおよび会員農場の次世代交流会等の実施

次代を担う若手がSPF養豚や協会事業に対する理解を深め、交流できる場を設けます。意見交換を通して、若い世代の考え方を事業推進に活かせるようにします。

◎協会だよりの発行、協会ホームページの活用

年4回発行の協会だよりやホームページを活用し、疾病問題、ワンヘルス、AW等々、業界を取り巻く様々な課題に対して情報提供していきます。また、会員同士の交流の場として活用するほか、インターネットを利用したSPFポークへの正しい理解、認知度アップにも取り組みます。

◎協会の将来像、認定制度のあり方についての検討

これからの協会のあり方、ヘルスチェック検査の課題等について、ピラミッド、日本SPF豚研究会の協力を仰ぎながら、引き続き協議していきます。

◎認定成績集計データの活用、表彰制度の継続

CM農場の生産成績のフィードバック（ベンチマーキング）、成績優秀農場の表彰、上位農場の認定証Aマーク貼付等継続します。活用方法や選考基準等も引き続き検討していきます。

◎認定業務を始めとする事務のDX化、事務局のスリム化

協会プライベートクラウドシステムの構築を目指して、専門業者と具体的な協議を続け、事務処理のDX化を図ります。まずは認定申請書類を電子化し、農場やピラミッド担当者および事務局の業務負担軽減を図り、認定委員会の効率化につながることを目指します。事務局のスリム化についても、引き続き専門業者と相談しながら調査・検討を進めていきます。

●理事の改選、代議員及び監事の交代

6期12年にわたり会長を務めた北島克好氏と8期16年、事務局長を経て専務理事を務めた藤田世秀氏が退任、新たに鷺谷敏一氏が会長、小林一彦氏が専務理事に就任いたしました。副会長には坂口一平氏および増穂賢志氏が再任、北島克好前会長は顧問および監事に就任いたしました。

また東北地区選出代議員の渡邊和宏氏（有）ケイアイファウム）が及川徳康氏（同）、飯田恭久氏（全農畜産サービス（株）東日本原種豚場）が富田晃章氏、中部・北信越地区選出代議員の古越邦彦氏（JA全農長野SPF豚繁殖センター）が澤村賢治氏（同）、九州地区選出代議員の太田昇氏（株）ファームテック）が高橋真之氏（同）に、それぞれ交代いたしました。任期は令和7年までとなります。

今年度の理事・監事は次の通りです（任期：理事2年、監事4年）。

		(順不同、敬称略)	
会 長	鷺谷 敏一 (新任)	全国農業協同組合連合会	
副 会 長	坂口 一平 (再任)	全農畜産サービスピラミッド	
副 会 長	増穂 賢志 (再任)	シムコピラミッド	
理 事	下山 安 (再任)	サンエスブリーディングピラミッド	
理 事	金内 一浩 (再任)	ホクレンピラミッド	
理 事	大関 輝男 (再任)	日本農産工業ピラミッド	
理 事	日浅 文男 (再任)	(有)道南アグロ	
理 事	矢吹 和人 (再任)	(有)常陸牧場	
理 事	下山 正大 (再任)	(有)下山農場	
理 事	小椋 和典 (再任)	(株)西日本ジェイエイ畜産	
理 事	高橋 真之 (新任)	(株)ファームテック	
専務理事	小林 一彦 (新任)	日本SPF豚協会	
監 事	川島 力		
監 事	北島 克好		

第14回

農場バイオセキュリティ強化のための最新情報



飼養密度と発育・病気との関係

アニマル・バイオセキュリティ・コンサルティング(株)

三宅眞佐男

豚群の飼養密度は飼養衛生管理基準12項で「密飼いの防止」として規定されており、必要最小面積は畜産技術協会が表1のように示しています。飼養密度が大きいと発育や病気に悪影響を及ぼすだろうと想像できますが、具体的なデータを紹介します。

最初の例です。日本に於いてヒトで2020年以降発生が増加した新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) について名

古屋工業大学が16都道府県を対象に解析した研究結果⁽¹⁾です。

図1は人口密度が大きくなると累積陽性者数が有意に増加することを示しています。図2は人口密度が大きくなると陽性者が拡大する期間や収束する期間が相関して長くなることを示しています。この内容は養豚環境への示唆に富んだものではないでしょうか。つまり、豚舎に於いても飼養密度が大きいと疾病が長期間に渡って拡大、増加し、長びくということなのです。

次に、表2は養豚環境での飼養面積と増体重、食下量、飼料効率、疾病・事故発生率に関する文献調査結果です⁽²⁾。密飼い群では増体成績などが低下しますが、狭かった面積を通常面積にすると増体成績が良くなる例などを示しています。また、面積が狭いと事故率は有意に高く、面積を拡大すると疾病発生率や事故率も低下する傾向があるという結果です。

これらの具体例から飼養密度と生産性が密接に関連していることが確認できます。

- (1) E. Rashed et al, Int. J. Environ. Res. Public Health, vol.17, p.5354(1-14), 2020.
- (2) 明治アニマルヘルス株式会社 営業部学術課 Swine Disease Information Vol.25「肉豚の発育を左右する要因～密飼いの影響」から抜粋 2008

体重(kg)	必要面積(m ²)
30	0.32
70	0.57
110	0.77

計算式：面積(m²) = a × 体重(kg)^{0.67}
 (a=0.033 : EUの係数横臥時0.047と立位時0.019の平均)
 AWに対応した豚の飼養管理指針 2020.3 畜産技術協会

表1 必要最小面積 (1頭あたり)

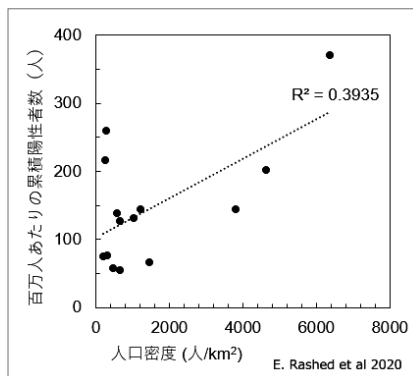


図1 人口密度・累積陽性者数

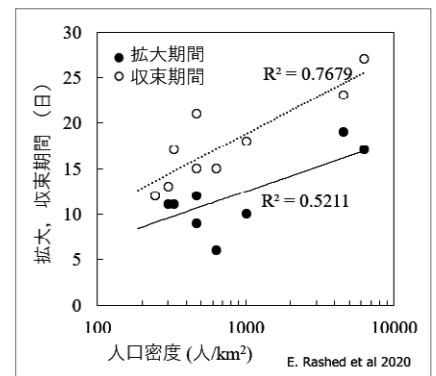


図2 人口密度・拡大・収束1

報告者	年	供試豚	観察期間	占有面積/頭	ADG	ADFI	G/F	疾病発生率	事故率	備考
Wolter 5 1)	2003	平均体重5kg (15日齢) wean-to-finish	15日齢離乳	0.63 (m ² /頭)	607	977	0.622		1.6%	両群の給餌スペースは4cmと2cmであり、その差の影響も含む。
			5-8週後	0.21 (m ² /頭)	548	903	0.607	3.4%		
			15日齢離乳	0.63→0.63m ²	812	2,215	0.360	3.6%		
Wolter 5 2)	2002	平均体重5.9kg (17日齢) wean-to-finish	9-23週後	0.21→0.63m ²	836	2,261	0.370	2.8%	2.8%	肥育で占有面積・給餌スペースを対照と同一にする8週まで密飼いの方が逆にその後の増体はよかった
			1/7日齢離乳	0.64 (m ² /頭)	545	942	0.57	2.1%		
			17日齢離乳	0.64→0.64(m ²)	792	2,300	0.34	4.7%		
Brum 5 3)	2001	平均体重6.6kg (24日齢) 試験終了豚	11週後-出荷	0.32→0.64(m ²)	810	2,285	0.35	3.6%	3.6%	出荷日齢は0.64→0.64m ² 群が2日遅かった(0.32→0.64m ² 群は後半の飼料効率がよかったが違いがなかった)
			24-59日齢	0.16 (m ² /頭)	364	609	0.602	0.0%		
			上記	0.25 (m ² /頭)	408	683	0.601	0.7%		
			19-110kg	0.16→0.56 (m ²)	817	2,533	0.323	3.6%		
Street 5 4)	2008	平均体重 37.4kg	21-110kg	0.16→0.78 (m ²)	849	2,589	0.328	1.2%	1.2%	肥育移動先が狭いとADGに影響するが、豚乳肉の採量を肥育まで引き上げることはない。肥育は0.56m ² /頭では不十分。
			0.25→0.56 (m ²)	781	2,465	0.318	5.0%			
			0.25→0.78 (m ²)	867	2,665	0.326	5.0%			
			37-95kg	0.52 (m ² /頭)	1,032	2,834	0.370	4.34%		
				0.78 (m ² /頭)	1,077	2,774	0.396	3.30%	密飼いの群は食餌時間が少なかった	

ADG ; 1日平均増体重 ADFI ; 1日平均食下量 G/F ; 飼料効率 (増体/飼料比) 参考文献 [2]
 太数字 ; 有意差あり (P<0.05 ; ■は密飼いの群が増体成績低下区、□は占有面積を通常に戻した後、対照より増体した区)

表2 1頭あたりの占有面積と増体成績、疾病発生・事故率

協会からのお知らせ

●北島会長と藤田専務が退任、赤池最高顧問は名誉会長に

総会記事にもあります通り、北島克好会長と藤田世秀専務理事が6月16日の定時総会において退任いたしました。お二人とも長きにわたってその任をお務めいただき、協会事業推進に多大なるご貢献をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。北島さんには顧問および監事として、藤田さんにはSPF豚農場認定委員会学識経験者委員として今後ともご指導・ご協力を賜りたく存じます。

また、協会最高顧問である赤池洋二元会長はこのほどめでたく90歳の卒寿をお迎えになられました。これを機に名誉会長にご就任いただくこととなりました。ますますのご長寿とご健勝を祈念いたします。お三方には6月16日の定時総会において花束を贈呈いたしました。



左から赤池洋二元名誉会長、北島克好顧問、藤田世秀認定委員

●認定委員の退任

3月の認定委員会をもって学識経験者委員の赤池洋二氏と花岡秀昌氏が退任されました。お二方はSPF豚農場認定制度を設立した第一世代であり、事業発足時より30年にわたり、中心

となって事業そのものを支えていただきました。これからも大所高所より協会を見守っていただきたいと存じます。長い間本当にありがとうございました。

●SPFポークの誤った表現防止にご協力下さい

SPFポークを取り扱う通販サイトや飲食店の一部で「レアでも食べられる」「無菌豚」といった表現が散見され、協会に情報提供や問い合わせが相次いでおります。読売新聞社会部からも取材を受け注意喚起の記事が掲載されました(写真)。

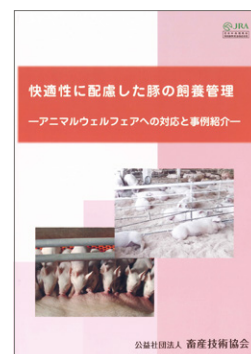
協会ホームページでもお願いしていますが、このような表現をみかけましたら、協会までご連絡ください。正しい知識と情報提供にご協力をお願いします。



●アニマルウェルフェアに関するリーフレットが完成

公益社団法人畜産技術協会より『快適性に配慮した豚の飼養管理—アニマルウェルフェアへの対応と事例紹介』と題したリーフレットが制作されました。若干部数提供いただきましたので、ご希望の方は事務局までお問い合わせください。なお、同協会のホームページからPDFファイルをダウンロードできます。ぜひご覧ください。

http://jita.lin.gr.jp/report/animalwelfare/R04/R4_pig_AWreport.pdf



プロのシェフおすすめ、カンタン、おいしいSPFポークレシピ



SPF豚のからし焼き

●レシピ提供・北の家族 仙台タワービル店(宮城県仙台市)

八木澤 幸子

今回のレシピは豚肉料理としてはちょっと変わった味付けになりそうな、からし味のソテーを教えてくださいました。厳しい暑さでもからしのピリ辛感は食欲をそそりそうです。ぜひお試しください。

●材料 ●(2人前)

SPF豚肩ロース 100g×2枚

にんにく ひとかけ

サラダ油 大さじ1

<合わせ練りからし>

練りからし 15g

料理酒 5g

<たれ>

薄口しょうゆ 20g

ケチャップ 10g

料理酒 40g

砂糖 10g

みりん 20g

鶏ガラスープ(顆粒) 2g

ウスターソース 10g

付け合わせ 野菜やゆで卵などお好みで

●つくり方 ●

- ① ラップの上に豚肉を1枚置き片面に合わせ練りからしの半量を塗り、上に豚肉を重ねて残りの練りからしを塗ってラップで包みます。20分ほど置きます。
- ② フライパンにサラダ油とつぶしたにんにくを入れ弱火にかけ①を両面1分半ほど軽く焼き、一度取り出します。
- ③ 同じフライパンに弱火のままたれの材料を入れ1分半ほど煮詰め②の豚肉を戻し、1分半ほど絡めます。
- ④ お皿にお好みの付け合わせの野菜と一緒に盛り付け完成です。

★渡邊シェフからのアドバイス

豚肉を焼くときは弱火で。焼きすぎないことでやわらかく仕上がります。肉の厚さによって焼き時間を調整して下さい。

認定情報

●2023年6月認定農場

(有効期間：2023年6月8日から2024年6月末日まで)

北海道・鈴木ビッドファーム、青木ピッグファーム(株)、(有)フロイデ農場、**岩手県**・全農畜産サービス(株)東日本原種豚場、(株)のだファーム第一農場、同第一肥育農場、**茨城県**・(有)弓野畜産繁殖農場、同八郷農場、同千代田農場、(有)篠崎畜産、常陽醗酵農法牧場、**群馬県**・J A 東日本くみあい飼料(株)利根スワインセンター、利根沼田ドリームファーム(株)、(株)畜産経営研究所前橋農場、**千葉県**・(株)ユウアイ、同森戸農場、高橋幸雄養豚場繁殖農場、同肥育農場、(有)ピギー・ジョイ第1農場、木内養豚第1農場、同第2農場、**岡山県**・岡山J A 畜産(株)荒戸

※次回認定委員会は9月14日(木)の予定

山農場、**鳥取県**・(株)西日本ジェイエイ畜産名和農場、**愛媛県**・富永養豚、J A 西日本くみあい飼料(株)愛媛養豚実証農場伊予スワインガーデン、酒井ピッグファーム繁殖農場、同肥育農場、**佐賀県**・J A さが天山ファーム、**長崎県**・(株)伊藤ファーム繁殖農場、同肥育農場、(株)濱田ファーム、J A 全農長崎県本部五島種豚供給センター、**宮崎県**・(有)レクスト繁殖農場、同肥育農場、ジャパンミート(株)川南農場、ジャパンミート(株)御池農場、クリーンファーム(株)、**鹿児島県**・鹿児島いずみ畜産(株)三笠農場、(有)さつま農場、(株)かいたく大口農場(以上40農場)

※3月の認定委員会で3か月の認定期間延長が認められ、今回認定された農場

長野県・J A 大北白馬アルプス農場(1農場)

会長退任にあたって



一般社団法人日本SPF豚協会前会長
北島克好

このたび、定時総会(6月16日開催)において会長職を退任させていただきます。赤池会長を引き継いでの就任でしたが、2011年から2022年度までの6期12年間務めさせていただきました。

その間、2010年の口蹄疫、2013年のPED、2018年の豚熱、そして2020年の人の新型コロナと、度重なる疾病大流行の影響により、協会事業の根幹であるSPF豚農場認定事業遂行が困難になる危機的事態に直面しました。その都度会員農場およびピラミッドと一致団結し、さまざまな取組みによって解決をはかり、途切れることなく今日まで継続し、バトンを渡すことができました。

在任中、最も記憶に残る取組みとしては、2016年からSPF豚農場認定に関する認定規則・細則・防疫設備および管理基準を整理し一本化、規則としての体裁を整え、新規則をもとにした運用を開始したこと、また、2019年に協会創立50周年・法人化15周年記念事業として『日本SPF豚協会50年史一苦悩と模索の半世紀』を発行し、また関係各位の多大なる協賛を得て50周年記念セミナー・祝賀会を盛大に開催できたことです。

そのなかでも、一番記憶に残りましたのは、50年史編纂にあたり、協会に預かり保管されていた、故波岡茂郎先生(元農林水産省家畜衛生試験場細菌第一研究室長・北海道大学獣医学部教授、SPF豚農場認定委員会初代委員長)直筆の「波岡ノート」を掘り起こして、未公開部分を活字化したことです。混沌とした当時の情勢の中から協会設立にいたる決断までの先人達の矜持に心打たれました。

私とSPF豚との出会いは、全農入所後研究所に配属され、東京都小平市の家畜衛生試験場に豚を運んだことが始まりです。故柏崎守・前SPF豚農場認定委員会委員長には大変お世話になったことを記憶しております。

全農から北九州ジェイエイ畜産(株)(現北九州ファーム(株)、協会ピラミッドである全農畜産サービス(株)と職場は変わりましたが、その間、養豚業界のトップランナーのお一人である広島ポークの永野社長はじめ全国の名だたる養豚経営者の方々に、SPF養豚はじめ養豚そのもの、経営の何たるかを教えていただきました。縁あって協会会長の重責を担うことになった際にもその教えが大きな力になりました。

日本の養豚、畜産をめぐる環境は厳しさを増すばかりです。協会創立から半世紀が過ぎ、次の半世紀に向けて協会はどうかあるべきか、どうすべきか、その将来像を模索してきました。その中で「日本の養豚におけるSPF養豚—2040年にめざすSPF養豚」「SPF豚認定制度のあり方」「日本SPF豚協会の組織と運営のあり方」の三つのテーマを設けて、副会長らと検討を重ね、ピラミッドの協力のもと提言として成文化いたしました。どれも難しいテーマであり、課題は山積していますが、若い世代が中心となって引き続き、新たな視点での展開がなされ、答えをみつけてくれるものと確信しております。

在任中は、協会の会員の皆様をはじめ理事、役員、認定委員会委員、事務局および協会関係者の多くの方々の温かいご指導とご支援、ご協力をいただきました。これまでお世話になった方々には心から感謝し厚くお礼申し上げます。

今後も新会長鷺谷敏一氏のもと、これまで以上のSPF養豚の躍進と協会の発展のため、会員の皆様のより一層のご支援をお願いいたします。

皆様のますますのご健勝を祈念し退任にあたってのお礼の挨拶といたします。ありがとうございました。

編集後記

5月8日から新型コロナウイルスは感染法上5類に分類が移行しました。感染対策は自主判断に。しかし、ウイルスが消えてしまった訳ではないので、今後、正しく恐れる必要があります。油断大敵です。正しく恐れるといえば、農場の防疫対策も正にその通りでしょう。むやみに抗菌性物質・ワクチン頼みに走るのではなく、豚を健康に育てるための快適な環境を見直し(今月号に飼育密度のことが取り上げられています)、従業員の働く環境も最適化し、豚との触れ合いに命の意義を感じられる仕事にしたいものです。(世)の編集後記も今回で最後となりました。長い間目を通していただいた方に感謝申し上げます(世)。



日本SPF豚協会認定農場産シール

このマークは
日本SPF豚協会の
登録商標です

日本SPF豚協会だより

第92号 2023年7月1日発行(季刊)
発行 〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-8-2
TEL.03-5835-5375 FAX.03-5835-5376
e-mail:j.spf.a@nifty.com
http://www.j-spf.com/
発行人 鷺谷 敏一
編集人 小林 一彦